

九月二十八日、緑深き平泉の山懐にたたずむ中尊寺本堂で、
 オールドパー 第七回《伝承の共演》が催された。
 この六月にユネスコ世界文化遺産として登録された平泉の地への祝意と、
 東日本大震災後の東北にとって一つの希望となることを願って、
 「鎮魂」「祈り」「復興」をテーマとした奉納奏は、
 澄んだ空気に夏の余韻を残した初秋の空へと響きわたった。

平泉に 花開いた まほろばの雅

みやび

岩手県・平泉の中尊寺。八五〇年、比叡山延暦寺の高僧、慈覚大師円仁の開山。十二世紀初め、奥州藤原氏初代清衡公によって大規模な堂塔の造営が行われ、辺境とされた東北地方のみちのくに、理想の仏国土（浄土）を現出させた。創建当初の姿を今に伝える荘厳な金色堂をはじめ、中尊寺を含む「平泉の文化遺産」が、世界文化遺産となったのは記憶に新しい。

ユネスコ世界遺産サポータープログラムとして、日本の伝統芸能の発展的継承をテーマに七回目を数える《伝承の共演》が、その平泉の地で行われることになったのはなにかば必然であった。すべての生あるものを過去から現世、さらに来世にいたるまで仏国土に導きたいという願いを具現し、およそ百年の長きにわたって続いた奥州藤原氏の「まほろば」（理想郷）の世界文化遺産への登録は、みちのくを襲った大震災後の東北にとっての一つの希望であると同時に、明治開明期以降、日本の発展とともに



右ページ上:中尊寺本堂山門。下:能楽
葛野流大鼓方の亀井忠雄(人間国宝・
右)と亀井広忠(左)。上:オールドパー
12年。下・右上:前列左より、亀井忠
雄、亀井広忠、佐々木多門、大島輝
久、後列左より村治佳織、上田秀一
郎の各氏。右下:村治さんのギター独
奏。中上:上田さんの和太鼓。中下:金
色堂覆堂。左下:終演後の懇親会に供
されたディナー。東北の旬の食材がふ
んだんに用いられた。

に歩み、愛飲されてきたとされ
る由緒あるオールドパーの、日
本文化がもつ伝統の美と叡智へ
の敬意と見事にシンクロする。
中尊寺への「奉納奏」とされ
た公演は、太鼓奏者・上田秀一
郎の「光の道標」で幕を開けた。
勇壮な和太鼓の一打に堂内の空
気が張りつめる。続いて村治佳
織の深い音色を響かせるギター
独奏。最後を飾るのは、能楽葛
野流大鼓方、亀井忠雄・広忠父
子の太鼓、能楽喜多流シテ方の
佐々木多門と大島輝久の謡の共
演。平泉ゆかりの源義経を主人
公とした一調「屋島」、平泉に花
開いた雅を伝える一調「東北」、
謡曲「附祝言」が披露され、鮮
烈な鼓の音色と朗々と流れる謡
の調べが、招待された約八十名
の聴衆を、深遠かつ一期一会の
贅沢な時間へと誘った。

平泉に奉納された伝統の余韻
は、正統が継がれたオールドパー
の理想と響き合い、悠久の時を
超え、未来へと紡がれてゆく。

